

講評文

12月25日 3番目

長良高校

「十六の法廷」

演劇部が上演する「ヴェニスの人」、第十六国立銀行の開設の話、リトアニアで迫害されるユダヤ人のためにビザの発行に奮闘する物語の三つ話がリンクしていく作品です。バッドエンドとハッピーエンドの現実と、綺麗事の対立を表現していると思いました。

演技面では、役者たちの感情の変化が分かりやすく、観客が理解しやすい動きや表情でした。BGMが流れているのにも関わらず、セリフがとても聞き取りやすかったです。劇中の主要キャラクターを演じる人たちはとても表情豊かで、観客がそのキャラクターの心情を理解しやすかったです。クロスも、動きがとても素早く、一瞬で民衆や観衆になったりと気持ちや身体の切り替えがとてもうまかったです。そしてどのタイミングも絵になっていました。最後に場面転換の時に含まれていたダンスも、体幹がしっかりとしていないとあれほど短い間にキレイに観客に見せられないので、日頃の身体トレーニングを徹底しているのだと感心しました。

音響は序盤のダンスで観客を一気に引き込めるような選曲でした。途中で流れていたBGMは、物語の状況をわかりやすくしていました。曲が変わると共に時代の切り替わりを感じ、時間の流れがわかりやすかったです。照明はどの場面でも役者の顔がよく見えるように工夫されていたため、役者の表情がわかりやすかったです。

舞台は法廷のようなセットが作られていました。前に並べられた扉の板が外れ、柵へと変化した所が場面の展開にとっても合っていました。真ん中の扉を門のように開閉させるなど、色々なシーンを作り出す工夫がされていました。小道具や衣装は剣や船、舞台上で着物から西洋の婦人服に変身できる服など、高校演劇のクオリティではないほど凝られていて、よりリアル感が増していました。

この劇から、私たちの未来を切り開くために誰かが悪者を悪者にしなくても、みんなでハッピーエンドの未来のために、共に夢を紡ぐことで思いを繋いでいけるというメッセージを受けとることができました。